

2019年8月中旬に訪れた奥尻島の道路沿いには、外来植物キクニガナの青い花が沢山咲いていました。特に島の南部で多く見られ、アスファルトの隙間や路傍の荒地には沢山生えているのに、自然度の高い場所では全くと言ってよいほど見られませんでした。

キクニガナは、北海道本島でも、奥尻島と似たような環境に群生している姿を時折見かけますが、まだ何処にでも見られる程には定着していない印象です。花が咲き終わった花茎を揺ると、長さ1-2mmくらいの、少し角張った種子がパラパラと出てくることありますが、よく観察してみると、冠毛らしきものは殆ど見当たりません。という事は、風による散布だけでは、あまり遠くまでは行けないのかもしれないかもしれません。私見ですが、奥尻島に限らず、幹線道路沿いで見かける頻度が高い気がするので、往来する車が起す風に吹き飛ばされたり、時には濡れたタイヤにくっついたりして運ばれていくのかな、と想像します。



図1 2019年8月15日、奥尻島南部にて撮影
キクニガナ

野外で見かけるキクニガナは、わざわざ選んだかのように、道路沿いや荒地など、一見すると過酷に見える環境にばかり生えています。当然、しばしば草刈りや踏みつけに遭遇しますが、地際の節から腋芽を出して、再び開花する様子も見られます。背の高い草地や、自然度が高い場所でキクニガナを見かけない事を考えると、被陰にはめっぽう弱そうですが、刈られても子孫を残せるキクニガナにとって、生存競争相手が少ないアスファルトの隙間は、意外と生き延びやすいのかもしれない。

ところで、小さな白菜のような姿をした西洋野菜のチコリは、本種の栽培系統を畑で育てた後に、掘り上げて軟白栽培したものです。しかし、野生化したキクニガナの根出葉には深い切れ込みがあり、一見するとタンポポによく似た姿をしています。今回、奥尻島で初めて根出葉をじっくりと観察しましたが、開花個体の周りのタンポポかと思っていた植物の多くが、実は未開花のキクニガナだったことに気付きました。花茎を出していない若い個体も含めると、運転中に目につく個体数の倍くらいはありそうです。

アスファルトから逞しく茂る葉は、お世辞にもおいしそうには見えないので、奥尻帰りに行ったレストランで、サラダに入っている軟らかで丸みのあるチコリを見ても、野生に戻ったタンポポのような姿とは全く結びつかないのです。

(大沼 弘樹)